いのちの波止場

先日、『いのちの波止場』という小説を読みました。この小説はフィクションですが、穴水町にある終末期ケア病棟が舞台となっています。金沢の病院に勤める看護師が、半年間の終末期ケア研修を通して成長していく人間ドラマです。著者は、現役医師であり作家としても活躍されている南杏子さん。物語は、数名の末期がん患者との関わりを中心に進んでいきます。

自らの「死に方」は誰が決めるのか、親を看取るときに何ができるのか、そして自分が死を迎えるときはどうありたいかーー深く考えさせられました。医療面のリアルな描写は医師ならではであり、スタッフをはじめとする登場人物の描き方からは、著者の死に対する向き合い方と同時に、医療や介護に従事されている方々への深い感謝が伝わってきます。

小説の中には穴水町の風景や様子が随所に描かれています。「あすなろ広場」「中居 さとりの道」、内浦から見える海の景色、そして「キリコ祭り」。さらに、実際の建物やお店をモデルにしていると思われる中華料理店や居酒屋なども登場します。地元民ならピンとくる描写がたくさんあります。著者はこの物語を書くにあたり、綿密に町内を取材されたのでしょう。

読後に調べてみたところ、著者の別作品『いのちの停車場』は映画化されているそうです。穴水町が舞台の『いのちの波止場』も、映画化が期待できるのではないでしょうか。

これから、感想を出版社に送ってみようと思います。皆様もぜひ読んでみてください。そして、感想を出版社や著者に届けてはいかがでしょうか。

穴水町長　吉村 光輝